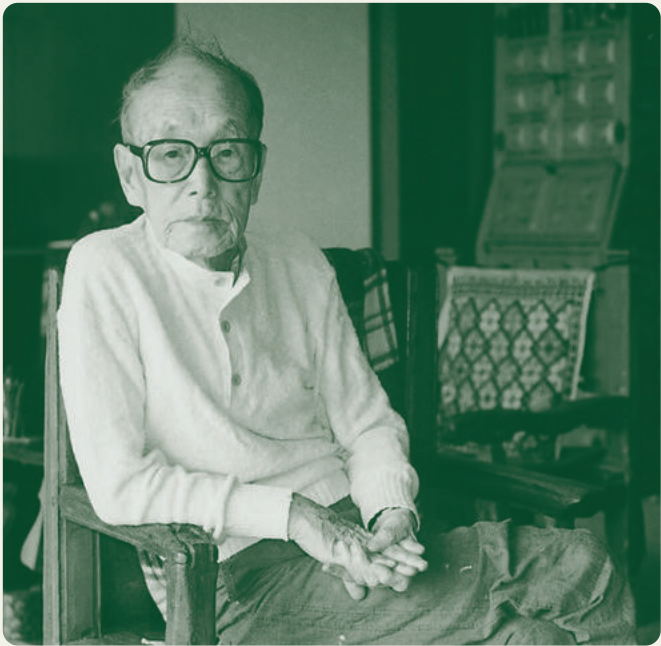




1986年 神奈川県真鶴町にて

中川一政 略歴

1893(明治26)年 2月14日 東京・本郷で生れる。父は金沢、母は松任(現・白山市)出身。幼くして母や姉と死別。本郷・誠之尋常高等小学校、神田・錦城中学校に学ぶ。10代から短歌や詩など文芸に親しむ。

1914(大正 3)年 処女作油彩《酒倉》が異画会展で入選。21歳。この頃より画家の道を歩む。『白樺』によって紹介されたゴッホやセザンヌを知る。武者小路実篤や岸田劉生らとの知遇を得る。『草土社展』や『二科会展』に出品し、15年に異画会二等賞銀牌、21年に二科賞を受賞。初の個展(神田・兜屋画堂)を開催。

1920(大正 9)年 詩集『見なれざる人』(叢文閣)を出版。

1921(大正10)年 石井鶴三、木村荘ハラと『春陽会』設立に参加し、以降出品を続ける。

1923(大正12)年 関東大震災。妻・伊藤暢子と結婚。30歳。

1927(昭和 2)年 小杉放庵発起の「老荘会」で中国古典を学び始める。

1928(昭和 3)年 東京朝日新聞連載の片岡鉄兵「生ける人形」の挿絵を担当。以降、尾崎士郎「人生劇場」や大佛次郎「天皇の世紀」など多数の挿絵を手掛ける。

1938(昭和13)年 第二回新文展審査員を委嘱される。

1945(昭和20)年 疎開先の宮城・宮床で終戦を迎える。

1949(昭和24)年 神奈川・真鶴にアトリエを構える。56歳。以降約20年にわたり(福浦港)を描く。

1953(昭和28)年 フランス、イタリア、イギリスを歴訪。60歳。

1961(昭和36)年 宮中・歌会始に召歌を詠進。「わかき日は馬上に過ぎぬ残る世を楽しまむと云ひし伊達の政宗あはれ」〈箱根・駒ヶ岳〉を描き始める。74歳。

1967(昭和42)年 文化勲章受章。82歳。

1975(昭和50)年 松任市立(現白山市立)中川一政記念美術館が開館。

1986(昭和61)年 真鶴町立中川一政美術館が開館。

1989(平成 元)年 パリ・カルナヴァレ博物館で「現代日本絵画巨匠二人展/奥村土牛・中川一政」が開催。

1990(平成 2)年 2月5日永眠、享年97歳。

1991(平成 3)年 墓所 雑司が谷霊園(東京・池袋)に眠る。



利用案内

開館時間／午前9時～午後5時
(入館は4時30分まで)

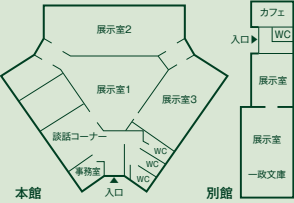
休 館 日／ 毎週月曜日※、年末年始、
展示替え等の期間
※祝休日は開館し、次の平日

入 館 料／一般 200円(100円)
高校生 100円(50円)
中学生以下無料

- ・()内20名以上団体観覧料
- ・特別展開催時は別途料金
- ・障がい者手帳提示の方は無料

写真上：本館外観
下：別館から日本庭園を眺める

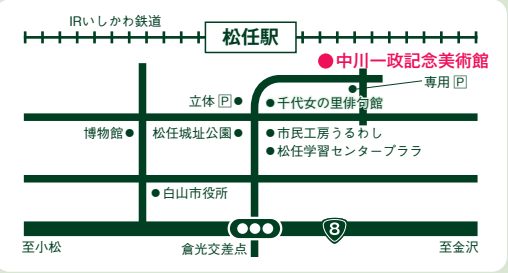
施設概要



構 造／鉄筋コンクリート造平屋建
延床面積／634㎡
本 館／405㎡
(展示室264㎡、談話室、事務室、収蔵庫等)
別 館／229㎡
(展示室及び一政文庫176㎡、カフェ)

交通案内

- 電車 松任駅※下車 南口から徒歩1分
(※普通列車で金沢駅から約10分、小松駅から約20分)
東 京～金沢 北陸新幹線 かがやき 約2時間半
大 阪～小松 特急サンダーバード 北陸新幹線 敦賀乗換 約2時間半
名古屋～小松 特急しらさぎ 北陸新幹線 敦賀乗換 約2時間半
- 飛行機 小松空港から小松駅経由で松任駅下車
- 車 北陸自動車道 白山ICより約10分
駐車場 専用駐車場8台(無料) 及び松任駅南立体駐車場(3時間無料)
- バス 北鉄バス「松任」経由の路線利用 「松任」停留所から徒歩3分



白山市立松任中川一政記念美術館

〒924-0888 石川県白山市旭町61番地1
TEL/FAX 076-275-7532
松任 中川一政 で検索



2024.3 改訂

松任中川一政記念美術館



《薔薇》1988年 油彩／カンヴァス 90.5×60.5cm

Nakagawa Kazumasa

Memorial Museum of Art

“美術は生術”

—美術は美しさを第一にしてはならぬ。

生きているかどうかを第一に考えねばならぬ。

—(写生とは)ものを写すことによって内面を写そうとする。

ムーヴマンをとらえ、画面に定着させようとするのが眼目だ。

「写生道一」『私は木偶である』より

画の道と多彩な芸術

明治に生まれ大正期に独学で画の道を歩み始めた中川一政は、戦後、神奈川県の実鶴にアトリエを構え、およそ20年に及ぶ〈福浦の時代〉と呼ばれる苦闘の時期を乗り越えて独自の画風を確立します。

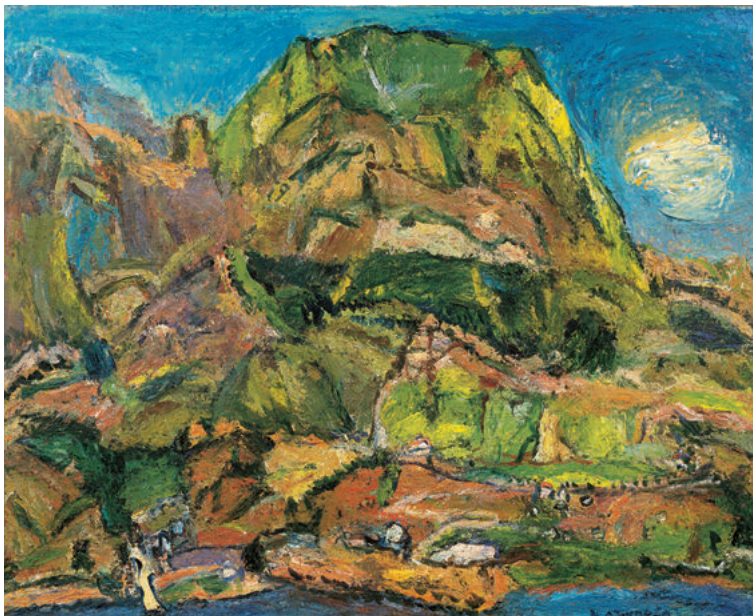
常に自己革新を目指して挑み続ける一政が、70歳代半ばで次の題材に選んだのは箱根・駒ヶ岳。対象を見つめ、そこから受ける感動をその場で表現するという〈現場主義〉は生涯貫かれ、90歳を越えても渾身の作品を生み出し続けました。画室で描かれた薔薇や向日葵の作品もまた、花の瞬間のいのちを捉え、生き生きと力強く脈打つかのように描き出されています。

98年に及ぼんとする生涯に一政は油彩を中心に、岩彩や水墨、書、陶芸また挿絵や装丁、そして短歌、詩、随筆などの文芸にと幅広い芸術活動を展開しています。



《マジョリカ壺の薔薇》
1976年 油彩／カンヴァス
72.7×53.0cm

生涯衰えることのなかった創作への情熱は、私たちに今を生きる勇気を与えてくれることでしょう。近代日本画壇の巨匠の生きた証をご堪能ください。



《駒ヶ岳》1975年
油彩／カンヴァス
130×162cm



《灯台》1965年
油彩／カンヴァス
60.6×72.7cm

《向日葵とスペイン壺》1978年
油彩／カンヴァス 60.6×72.7cm



《正念場》1989年 墨書／紙本
85.0×30.5cm



《われはでくなり》1985年 φ35×H2cm



《唐津皮鯨茶碗-久方-》中里窯
φ14.0×H9.8cm



《鯛・大器晩成》1977年 岩彩／紙本 42.0×66.5cm

母のふるさとの美術館

—私のはじめての記憶に、汽車の中であんころをたべたような気がする。
…松任のあんころ餅は昔から名物である。 『腹の虫』より

これは、一政が3歳の頃に両親と帰郷したときの思い出です。20代の頃にも幾度か両親の故郷・石川を訪ね、親戚の家などに滞在して画を描いています。1921年の二科賞受賞の朗報は、地元新聞でも伝えられました。

本美術館は、1986年 一政から作品の寄附を受けて、初の個人美術館として母のふるさとの地に開館しました。